

多文化関係学 2006,3,151-160

Multicultural Relations 2006,3,151-160

研究ノート

多文化関係における日本的コミュニケーションの可能性 —「察し」に内蔵された肯定的側面—

A Possibility of Japanese-Style Communication in Multicultural Relations: A Positive Element Embedded in *Sasshi*

石黒 武人 Taketo Ishiguro

要 旨

本稿の目的は、日本文化における対人行動規範の説明モデルとして提示された「遠慮と察しのコミュニケーション(Ishii, 1984)」の「察しのコミュニケーション」が多文化的状況において有用であることを論証しようと試みることである。「遠慮と察しのコミュニケーション」に限らず、文化特定とみなされる要素は、特殊と普遍、文化特定と文化一般、文化と文明といった二元論的区分のなかで、いったん特殊というカテゴリーに判別されると、その範疇を超えて分析や考察をすることが難しくなり、新しい研究の方向性が閉ざされる。そこで、文化特定な要素である「察しのコミュニケーション」が多文化的状況においても有用性があると仮定し、多文化的なコンテキストにおいて文化特定要素が持つ可能性について考察を試みた。本稿では、「察しのコミュニケーション」は、メッセージの意味を読み取る推察力、そして他者に対して配慮、共感できる能力を養成する特質を持つことを示し、「察しのコミュニケーション」によって培われるそれらの能力が、多様性に関する知識と組み合わせられた場合に、多文化的状況を多元的に把握する上で有用である、という結論に至った。察しの能力を基盤とした多元的な状況把握力は、日本人が今後直面する種々の多文化的状況において、人々が持つ多様性の発現を促し、互恵的な関係を構築する一助となる可能性があると考えられる。
キーワード：察し、文化特定、多文化的状況、意味の複数性

Abstract

Ishii (1984)'s *Enryo-Sasshi* Communication model characterizes Japanese-style communication. This paper attempts to discuss the applicability of this culture-specific *sasshi* (sharp guess-work) ability to multicultural settings. In Japanese culture, *sasshi* communication has a mechanism through which people gradually acquire the ability to guess what others really mean from indirect or subtle verbal and non-verbal expressions. Also, it allows people to nurture the ability to sympathize with and understand others' feelings and positions. These abilities, as long as they go hand in hand with knowledge of cultural diversity, can be converted into the ability for many Japanese not only to sympathize with and understand multiple positions of culturally diverse people but also to create mutually beneficial relationships in multicultural contexts.

Key words : *sasshi*, culture-specific, multicultural settings, multiple meanings

1. はじめに(研究テーマ)

国際的な場面における日本人のコミュニケーションに関する言説は、一般的にも学術的にも消極的評価が大勢を占めているような観を呈している¹。例えば、「日本人は高コンテクスト文化を背景²としてメッセージの言語化に消極的であり、多文化的なコミュニケーション場面では意思の疎通をうまく行うことができない」といった見方がある。多様な文化的背景を持つ人々がやりとりを行う場面では、低コンテクストなコミュニケーション状況となる³ため、コンテクストの説明を含むメッセージの言語化に消極的で他者に「察する」ことを期待する日本人の多くは意思の疎通を十分に行うことができない、というのである。

上述した理論的説明が示すように、日本的なコミュニケーションに対する評価は芳しくないが、日本的なコミュニケーションには多文化的な状況において何かしら貢献できる肯定的側面はないのであろうか。先行研究を概観する限り、多文化的状況における日本的なコミュニケーションの有用性に焦点を当て、それを明らかにしようとする研究は見当たらない。多文化社会化が進む日本社会において多様な文化的背景を持つ人びとと日本文化内で育ってきた人びとが相互理解を深め、互恵的な関係を築いていくためにも、日本的コミュニケーションのどのような部分が多文化的状況の何に対して有用であるのかについて考察することは重要であろう。そこで、本研究の目的は、Ishii(1984)が日本人の個人内および対人コミュニケーション過程を説明した「遠慮と察しのコミュニケーション」における「察しのコミュニケーション」に焦点を絞り⁴、「察しのコミュニケーション」が多文化的状況の場面で持つ可能性について論述しようとする試みである。

「察しのコミュニケーション」という文化特定とみなされる要素は、特殊と普遍、文化特定と文化一般といった二項対立的な区分のなかで、いったん特殊というカテゴリーに判別されると、その範疇を超えて分析や考察をすることが難しくなると考

1. 林(1994)、pp.18-19、久米(1996)、pp.194-203を参照。久米(1996)は、日本人のコミュニケーションに関する消極的な評価を異文化摩擦の事例とともに紹介している。

2. 林(1994)、pp.70-72、石井(1996b)、pp.90-91、p.132、池田・クレマー(2000)、pp.33-35を参照。ただし、林(1994、p.72)は「同じ地域でもいろいろな変化や程度の差が存在」と指摘している。さらに、池田・クレマー(2000)は高コンテクスト文化としての日本文化を認めながらも、近年の言語コミュニケーションを重視する立場を踏まえ、日本社会の多様化を指摘している。

3. 林(1994、p.74)は、「異民族間の接触は低コンテクスト・コミュニケーションを要請する」と指摘している。

4. Ishii(1984)が「遠慮と察しのコミュニケーション・モデル」を提示してから20年以上経過した今、現代日本社会におけるこのモデルの有用性を疑問視する声が想定される。確かに、現代日本社会において、若者の「察しの悪さ」が指摘されたり、米国中心のグローバル化を背景として、言語化を重視したコミュニケーション観が浸透してきた感があり、「察しのコミュニケーション」という考え方の妥当性が問われるところである。しかしながら、過去10年の異文化コミュニケーション研究における調査内容(e.g.清, 1997; 海野, 2002; 大崎, 2006)を確認してみると、察しの能力を前提とした間接的もしくは制限された言語表現が異文化コミュニケーションにおける日本の問題としていまだに挙げられている。つまり、日本は「相対的に察しがまだ通用する社会(手塚, 1998、p.143)」であると言える。

えられる。そこで、この試論では、文化特定な要素が異なる文化的コンテキストにおいても有用性がある側面を持つと仮定し、文化特定の「察しの能力」が、ある条件のもとで多文化対応型の人材が持つべき能力に転化される可能性について考察しようとする。

本論では、3つの論点を柱として以下のような構成で論述を進めていきたい。まず第1に、本稿における日本的な「察しのコミュニケーション」の特質とは何かを明示しようとする。そのため、「察しのコミュニケーション」について言語文化的ならびに文化心理的視点から考察し、その特質について解釈を提示する。第2に、「多文化的状況」について、ロラン・バルトの文化記号論を用いて分析し、その特質について考察する。第3に、多文化的状況の特質が人々に要求している能力を踏まえた上で、「察しのコミュニケーション」のどのような点が「多文化的状況」の何に対して有用であるのかについて論述しようとする。では、まず、本稿における日本的な「察しのコミュニケーション」の特質について論述を進めたい。

2. 察しのコミュニケーション

石井(1996a)によれば、日本文化は高コンテキスト文化にあたり、日本人はコミュニケーションにおけるメッセージの言語化に消極的である。そのため、限られた記号から意味を読み取る「察しのコミュニケーション」が発達する。では、「察しのコミュニケーション」の個人内および対人コミュニケーション過程について概観してみよう。日本文化のコミュニケーションにおいて、送り手のメッセージは、相手に応じて適切な言動を選択するための個人内フィードバック過程である「遠慮」による記号化過程を経る。そのために、メッセージは「減量、形式化および曖昧化(石井、1996a, p.128)」される。したがって、メッセージの受け手は、メッセージを察しの能力で補足および拡充し、発展的に記号解釈する。つまり、人々は制限されたメッセージから意味を想像する力、もしくは言語化されない部分を顕在化させ、意味を読み取る力を伸ばすための訓練を日常的に行うことになる。

具体例として、日本人同士のビジネス交渉の現場を挙げ、交渉相手がある提案に対して「検討いたします」と言った場面について考察したい。「検討いたします」といったメッセージの送り手は自分が断ることで相手の気持ちを傷つけない、もしくは不必要なコンフリクトを起こさないために、非明示的、間接的表現を用いている。一方、メッセージの受け手は、「検討いたします」という記号が日本文化内で意味する一元的な解釈、つまり、交渉相手が「断った」という真意を察することができるので

ある。「察しのコミュニケーション」では、以上のような個人内および対人コミュニケーション過程を経る。

では、「察しのコミュニケーション」の特質をさらに明らかにするために、「察し」という言葉とその動詞形である「察する」の語義に焦点を当て、その言語文化のおよび文化心理的側面について考察する。まず、『広辞苑』によれば、「察し」の意味は「おしはかること」、「おもいやること」および「推察」となっている。また、動詞「察する」の意味として、「①おしはかって考える、思いやる、同情する」、「②細かく取り調べる、詳しく調べる」とある。次に、『大辞泉』によれば、「察する」とは「①物事の事情などをおしはかってそれと知る」、「②他人の気持ちをおしはかって同情する、おもいやる」とある。さらに、『日本語大事典』では「①おしはかって考える(= guess)」、「②思いやる(= sympathize with)」、「③事情・意味をのみこむ(= understand)」と英訳付きで説明されている(梅棹他監修, 1989, p.779)。

以上3つの文献に示された意味を分類すると、①おしはかって考える、②思いやる、③事情をのみこむ、という3つの意味に加え、④詳しく調べる、という意味があり、大きく4つに分類される。そのうち、「察しのコミュニケーション」に直接的に関わると考えられるのは、人物の体質(村松監修, 1995, p.1080)などを「詳しく調べる」という文脈で用いられる4つ目を除いた残り3つであると考えられる。第1に、おしはかって考えること。これは純粹にある言語的・非言語的記号からその意味を汲み取る類推力、推察力であると考えられる。第2に、思いやること。これは他者の気持ちに共感したり、同情したりすることであると考えられる。第3に、事情をのみこむこと。これは様々な事情を受け入れ、理解を示すことであると考えられる。

第1の意味である「おしはかって考える」という行為は「察しのコミュニケーション」の特質である。しかしながら、それは日本文化に限ったものではない。リーチ(1987)はコミュニケーションの目標について、話し手の発話の直接的な意味内容だけでなく、相手の発言の意図を推論し、そこに含まれる目標を理解することを挙げている。例えば、ある米国映画における夫婦間の会話で妻が冷蔵庫の中を覗き込みながら「We are out of milk」といった場合、メッセージの受け手である夫は「ミルクがなくなった」という発話の直接的な意味よりも「ミルクがなくなったから、買ってこなければいけない」という真意をよみとる。これは察しの第1の働きである。

一方、第2の「おもいやること」という意味は、「察しのコミュニケーション」における他者に対する共感、もしくは同情心と言い換えることもできよう。「心情を察する」という慣用句はその一例と言える。日本文化における対人コミュニケーションで人々

が身につけていく他者志向の心理的特性を「察し」という言葉の第2の意味が示している。

加えて、「察し」が慣用表現として「察しが早い」、「察しが付く」、「お察しのとおり」といった形で使われることから、「他者の気持ち」に加えて、他者を取り囲む「状況」についておしはかって考える働きを持つと推察できる。これは、上述した3つ目の意味の「様々な事情を受け入れ、理解すること」という「状況」への理解を示す「察し」であろう。

以上のように、「察し」、「察する」という表現の意味について分析し、考察してみると、「他者への共感、同情心」および「状況への配慮、受け入れ」のどちらの場合にも、自己本位の姿勢ではなく、「自分以外の存在への配慮」が特徴的であると考えられる。この解釈に基づけば、「察し」という行為の背景には、「他者志向」とも言える心理がある。中山(1988)は、日本人の対人関係における心理について言及するなかで、この他者に対する配慮を「相手を不快にさせまい」とする「肥大化した配慮」と呼んでいる。本稿では、この「自分以外の存在への配慮」を日本的な「察しのコミュニケーション」が持つ重要な特質として扱う。この特質は、人間間、人間-自然間の調和を生みだそうとする人々の文化心理的な姿勢の表れとしてみることもできよう。

ここで、日本的な「察しのコミュニケーション」の特質を整理したい。まず、対人コミュニケーションにおける個人内の「察し」の働きは、1)メッセージの発信者の発話内容および真意の推察、2)メッセージの発信者の心情に対する共感、同情、そして3)自己および他者を取り巻く諸事情に対する了解という3つに分けられる。2)と3)の基盤となっているのは、コンフリクトの回避や他者との調和を目的とした「自分以外の存在への配慮」という文化心理的姿勢であり、日本的な「察しのコミュニケーション」の特質である。この3つの働きは独立して行なわれたり、同時に行なわれたりするが、特に同時に発揮された場合を日本的な「察しのコミュニケーション」として本稿では扱う。

他の文化においても「自分以外の存在への配慮」を重視するコミュニケーションはあるという反論が想定される。確かに、そのようなコミュニケーションは他の文化にも存在すると考えられる。加えて、何が「日本的」かという重要な議論はより広範かつ厳密に行われる必要がある。ただし、本研究では、日本的「察しのコミュニケーション」の特質を上述のように解釈し、その特質を持ったコミュニケーションが多文化的状況の何に対して有用性があるかに焦点を絞って論述を続けたい。次に、本研究において「多文化的状況」の特質をどのように捉えているかについて論じようと試

みる。

3. 意味の複数性

昨今、多文化的状況といった表現が用いられる。しかしながら、多文化的状況⁵が一体どのようなものであるのかということについて精緻に論述している研究は少ない⁶。本稿では、ロラン・バルト(Roland Barthes)の文化記号論を用いて多文化的状況を分析し、その特質について考察しようとする。では、まず、バルトの文化記号論について概説する。バルト(1967)は『神話作用』のなかで、人々はある意味作用の世界(神話の世界)のなかで生活し、特定のやり方で記号を使用し、解釈していること描き出した。彼は人々によって営まれる意味作用(神話作用)について、ディノテーション(明示的意味)とコノテーション(暗示的意味)という言語学の用語を用いて説明している。

神話を生み出す記号システムは階層構造(図1)になっている。まず、第一の層(図1の最上層部)では、「1. シニフィアン」は言葉の音響イメージであり、「2. シニフィエ」がその意味内容である。この第一の層は語義どおりの記号システムであり、「2. シニフィエ(意味内容)」をディノテーション(明示的意味)という。「1. シニフィアン」

1. シニフィアン	2. シニフィエ (ディノテーション)	
3. シーニュ I. シニフィアン		II. シニフィエ(コノテーション)
III. シーニュ		

図1 (内田樹, 2004 p.102を基に作成)

5. ここでいう「多文化的状況」とは、人口構成の上で、互いに異なる3つ以上の文化出身の参与者間における対人コミュニケーション場面である。一例としては、日本人、イタリア人、そしてアメリカ人によって構成されるカー・デザインチームが新規のデザインについて意見を交換している場面を挙げることができよう。

6. N.J. アドラーの『異文化組織のマネジメント』(江夏健一・桑名義晴監訳)、124項から142項における「マルチカルチャー・チーム」に関する説明が多文化的状況で起こりうるプロセスを理解する上で手がかりとなる。拙著の研究ノート「多文化」と表現することの妥当性について―多文化か、それとも、異文化か?―(石黒、2006)では、アドラーの説明を基に、多文化的状況の特性について「多文化性」という説明概念を用いて詳説している。

と「2. シニフィエ」が一体となった「3. シーニュ」が、第二の階層の「I. シニフィアン」となり、その「II. シニフィエ」が合わさり、「III. シーニュ」を形成している。この第二位の層における「II. シニフィエ」がコノテーション(暗示的意味)、つまり、神話(メタ言語、上位言語)である。

「神話作用」の例として、竹田(1992)は「エキゾチック・ジャパン」というキャッチ・コピーを挙げている。竹田によれば、このコピーのディノテーション(明示的意味)は「東洋的(神秘的)な日本」にすぎないが、コピーが伝えるコノテーション(暗示的意味)は「日本は西洋以上に見所がある」という神話である、と分析している。9.11同時多発テロ以降では、イスラム教徒の人々が「イスラム＝テロリズム」という不当な神話作用にさらされている。

以上のような神話作用の働きは、多文化的状況でも人々の認識のなかで立ち現れ、多様な意味⁷の形成に寄与している。一つの記号に対して多様な文化の視点から神話が生み出され、複数の意味が並存している状況となる。ここでは、多文化的状況が待つこの特質を便宜上「意味の複数性」と呼びたい。ここで重要な点は、神話作用により、一つの記号は複数の他者によって重層的に解釈されるという点である。この多元的なかつ重層的な意味の形成は、多文化的状況の把握を難しくしている要因と言えよう。結果として、参加者間における相互理解や現状理解に対する共通理解の形成を困難にしている。

「意味の複数性」のために、メッセージの発信者はメッセージの意味を主体者として制御できない。一方で、メッセージの受信者は相互作用の過程で生起する無数の意味をすべて把握することができない。以上のことは、多文化的状況では人びとの間で誤解、摩擦、対立が生まれるのがごく自然であることを示唆している。

4. 多文化的状況における察しの有用性

上述したように、「意味の複数性」という特質は複雑な意味空間を提供している。ここで、その「意味の複数性」が多文化的状況に参加する人々に求めている能力を確認しておく必要がある。本稿では、その能力として少なくとも2つの状況把握力を挙げたい。

まず、第1に、(多文化的状況において多数的に形成される意味をすべて読み取ることはできないが、)他者の言動および他者の視点から見た自己の言動に対する多元

7. 箕浦(1998)によれば、「人間はある特定の文化のなかで育つうちに、育ちの場で展開される行為のやり取りのなかにたたみ込まれている文化的意味を選択的に摂取し、自らの意味世界を紡いでいく(p.46)」箕浦は、そうしてできた内面環境を「意味空間」と呼んでいる。

的な意味をできうる限り推察する力である。ここで重要な点は、自文化の意味体系が要求してくる一義的かつ標準的な解釈ではなく、つねに他者の視点へ思いをめぐらし、複数の仮説的理解を生み出す能力である⁸。もちろん、ひとつの仮説的理解しか思い浮かばない場合には、解釈におけるその他の選択肢もありうるという判断留保的な態度を持つ必要がある。

第2の状況把握力は、多様な参加者間でお互いの意図について意味確認(clarification)を行う能力である。意味確認の方法は少なくとも2つある。まず、第1点目で言及した多数的意味への推察力を基盤にして、仮説的理解を得て、相手に聞いて確かめる作業が挙げられる。もう一つの方法は、現象学における判断停止(エポケー)である。自分の解釈をいったん『』に括り、脇において相手が言っている意味を確かめる作業を行う⁹。ここでも、相手の言おうとしていることを推察する力が必要とされる。

多文化的状況の特質が参加者に要求している状況把握力に共通している能力は推察力であると言えよう。この推察力を養成するのが「察しのコミュニケーション」である。ここで、本稿の主題である「察しのコミュニケーションの何が多文化的状況の何に対して有用性があるか」という問いに対する答えを示したい。「察しのコミュニケーション」に内蔵された「メッセージを補足および拡充し、発展的に記号解釈する」という推察力は、多文化的状況において生起する多元的な意味に関する仮説的理解を形成する点で有用であると考えられる。それには、「察しのコミュニケーション」における「自分以外の存在に対して配慮」し、「他者の気持ちに共感」する姿勢を多様な他者へ向けて、多文化的状況において他者の意図を推察し、確認することが条件となる。

ここで、察しの能力が多文化対応型となるためのメカニズムについて論じたい。まず、多文化的状況には多様なメンバーの「文化的意味体系(箕浦, 1998)」が持ち込まれている。人は異文化のような「特定の共同体の実践に参加することで、その共同体特有の文化的意味の選択的摂取が起こる(箕浦, 1998, p.57)。」多文化的状況には、多様なメンバーの文化的意味体系が持ち込まれるため、多様な文化的意味を選択的に獲得することになり、察しにおける記号解釈のベースとなる「意味空間を拡大していく(箕浦, 1998, p.57)」ことができる¹⁰。つまり、察しの能力が多文化対応型となっ

8. 仮定的理解を生み出すために、「相手に対する文化的・社会的スキーマ情報(池田, 1991, p.180)」の蓄積と活用が不可欠である。

9. 判断停止(エポケー)については、渡辺(2002)、pp.65-68を参照。また、判断停止する処置を現象学では「超越論的還元(先験的還元)」(竹田, 2004, pp.30-34)という。

てくる。

多文化対応型の察し(=多元的察し)には、文化的多様性に関する知識の獲得が必要な条件となる。その知識はマクロ文化とミクロ文化に関わるものがある。まず、国民文化、出身地域、民族的背景、社会階層、性といったマクロ文化に依拠した知識がある。マクロ文化に対して、ミクロ文化的視点から個人としての他者の独自性を踏まえた「特別仕様(池田, 1991, p.180)」の知識がある。これらの知識は、仮定的かつ発展的な知識であり、多様な経験を経て修正されていくものである。多文化的状況では、多様性に関する知識を用いつつ、多様な視点から、自己と他者の存在やそれらの関係を解釈するために、「メッセージを補足および拡充し、発展的に記号解釈する」のである。

6. おわりに

結論として、多文化的状況において、日本人がコミュニケーションに関わる場合、状況把握とメッセージの受信に限定する限り、特定の条件下で、察しのコミュニケーションによって養成される推察力と他者志向的な姿勢には有用性がある。その特定の条件とは、察する能力で必要とされる推察力が、日本社会のコンテキストに依拠した一義的な意味に収斂する働きとしてではなく、多義的な意味への想像力として働くことである。その場合に、日本的察しは「多元的察し」となり、多文化的状況において並存する複数の意味とその意味を規定する複数のコンテキストを読む一助となる。これは、異文化間心理学において、トリアンディスらによって主張されている「同型の帰属」を多様な他者の視点に沿ってできる能力とも言える。

また、そのような「多元的察し」で培われうる想像力と創造力は、自己、他者や諸現象の多面的な理解力を高め、他者と自己との関係に対する多重的な理解を促す。したがって、多様な他者との関係における新たな自己を了解するという発展的自己了解ができる人材を生む可能性を示唆している。そのような人材は、多様な視点と言動の交錯の過程で生まれるシナジーという新たな事態に対しても、柔軟な発想と更新可能な仮定的理解をもちつつ、積極的な関係態度を持って取り組んでいけると考えられる。

10 意味空間の拡大は、あくまでも察する人の認知フィルターを通じて行なわれる拡大であり、厳密に言えば、異文化の意味がそのまま取り入れられたとはいえない。また、箕浦(1998)が指摘しているように、異文化の文化的意味が認知でき、それに沿って行動できたとしても、自文化の文化的意味と対立するような場合は、情動レベルにおいて葛藤が残ることがある。

引用文献

- アドラー, N.J.(1996).『異文化組織のマネジメント』(江夏健一・桑名義晴監訳)セントラル・プレス.
- バルト, R.(1967).『神話作用』(篠沢秀夫訳)現代思潮新社.
- 林吉郎(1994).『異文化インターフェイス経営』日本経済新聞社.
- 池田謙一(1991).「<こころ>と<こころ> ―コミュニケーション―」池田謙一・村田光二共著『こころと社会認知心理学への招待』(pp.171-201)東京大学出版会.
- 池田理知子・クレマー, E.M.(2000).『異文化コミュニケーション・入門』有斐閣.
- 石黒武人(2006).「「多文化」と表現することの妥当性について ―多文化か、それとも、異文化か?―」『異文化コミュニケーション論集』, 4, 123-133.
- Ishii, S.(1984). *Enryo-sasshi communication: A key to understanding Japanese interpersonal relations. Cross Currents (Journal of Language Teaching and Cross-Cultural Communication)*, 11(1), 49-58.
- 石井敏(1996a).「対人関係と異文化コミュニケーション」古田暁監修/石井敏・岡部朗一・久米昭元著『異文化コミュニケーション 新・国際人への条件 改訂版』(pp.121-140) 有斐閣.
- 石井敏(1996b).「言語メッセージと非言語メッセージ」古田暁監修/石井敏・岡部朗一・久米昭元著『異文化コミュニケーション 新・国際人への条件 改訂版』(pp.81-100) 有斐閣.
- 久米昭元(1996).「異文化交渉と通訳」古田暁監修/石井敏・岡部朗一・久米昭元著『異文化コミュニケーション 新・国際人への条件 改訂版』(pp.185-206)有斐閣.
- リーチ, G.N.(1987).『語用論』(池上嘉彦・川上誓作訳), 紀伊国屋書店.
- 箕浦康子(1998).「文化心理学における<意味>」柏木恵子・北山忍・東洋編『文化心理学 理論と実証』(pp.44-63)東京大学出版会.
- 村松明監修, 小学館『大辞泉』編集部編(1995).『大辞泉』小学館.
- 中山治(1988).『「ぼかし」の心理 人見知り親和型文化と日本人』創元社.
- 新村出編(1998).『広辞苑 第五版』岩波書店.
- 大崎正瑠(2006).「日韓異文化コミュニケーションの一研究 ―在韓国日系企業のアンケート調査より―」『コミュニケーション科学』, 24, 215-228.
- 佐藤郡衛(2003).『改訂新版 国際化と教育 ―異文化間教育学の視点から―』財団法人放送大学教育振興会.
- 清ルミ(1997).「外国人社員と日本人社員 ―日本語によるコミュニケーションを阻むもの―」『異文化コミュニケーション研究』,10,57-73.
- 竹田青嗣(1992).『現代思想の冒険』筑摩書房.
- 竹田青嗣(2004).『現象学は<思考の原理>である』筑摩書房.
- 手塚千鶴子(1998).「異文化間対人関係」渡辺文夫編『異文化接触の心理学』(pp.133-146) 川島書店.
- 内田樹(2004).「ロラン・バルト」難波江和英・内田樹著『現代思想のパフォーマンス』(pp.81-147)光文社.
- 海野素央(2002).『異文化ビジネスハンドブック 事例と対処法』学文社.
- 梅棹忠夫・金田一春彦・阪倉篤義・日野原重明監修(1989).『講談社 カラー版 日本語大辞典』講談社.